

弥生土器の変化

1884(明治 17(1884)年)に東京本郷の弥生町向ヶ原貝塚(弥生町遺跡)から見つかった土器は、薄くて明るい色に焼き上げられています。飾られる文様も少なく、それまで知られていた縄文土器の上層から出土することや青銅器を伴出することなどから、縄文時代とは文化的背景が異なった新時代の土器で、出土地にちなみ弥生土器と命名され、この土器が使われた時代を弥生時代と呼んでいます。

縄文土器が基本的に深鉢と浅鉢というシンプルな組合せであるのに対して、弥生土器は貯蔵用の壺と煮炊き用の甕、物を盛る高坏や鉢などのバリエーションがあり、稲作文化によって日本列島に誕生した土器と言えます。

長年の研究によって、弥生時代は基本的に前期・中期・後期に時期区分され、一方の弥生土器はI～V様式に分類されています。近畿地方では、前期にはI様式、中期はII～IV様式、後期はV様式の土器が使われていました。近年では、弥生時代の最終末の土器をVI様式として取り扱っています。

ここでは、従来のI～V様式の滋賀県、守山市の弥生土器の概略をまとめてみました。



弥生時代前期の遠賀川式土器

弥生時代前期(I様式)

弥生時代前期のI様式の土器は、遠賀川式土器と呼ばれています。北部九州に定着後、稲作文化とともに東方に伝播したため、西日本一帯で形や文様が共通するという特徴があります。

弥生時代中期(II～IV様式)

前期には齊一的であった弥生土器も中期になると、地域色が芽生え始めます。甕の口縁の周囲何力所かが突出する波状口縁が現れますが、この土器は、中期後半以降に滋賀県の土器の地域色となった「受口状口縁」の祖形と考えられています。

また、器種も壺・甕・鉢・高坏などの基本器種と、新たに水差しや器台、台付鉢などが使われるようになり、多彩さのピークを迎えます。

そして、従来の櫛描文と新たに加わった凹線文によって、



弥生時代中期(IV様式)の土器



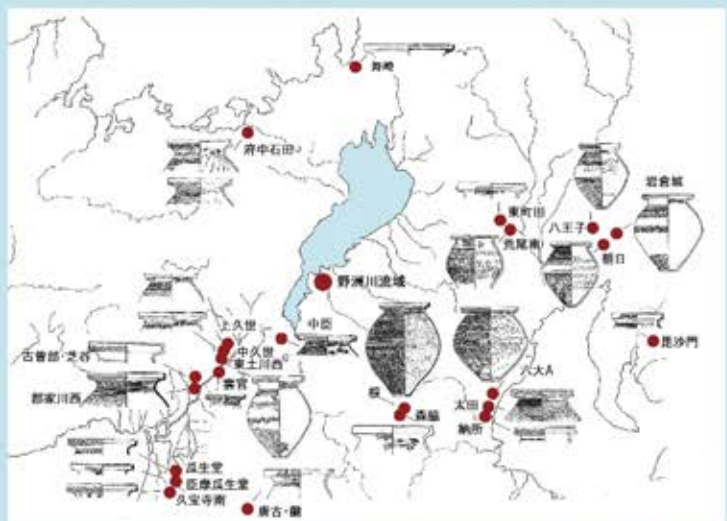
受口状口縁誕生の祖形・波状口縁甕と受口状口縁甕

装飾面でも一層華やかになります。

弥生時代後期(V様式)

後期になると、中期後半から発達した受口状口縁甕は、甕の主流を占めるにとどまらず、鉢や壺にも受口状口縁が採用されます。受口状口縁甕は、野洲川流域や近畿地方はもとより、広範な範囲で見つかり、他地域との活発な交流があったことを看取できます。

野洲川流域の地域色の盛行は後期にピークを迎え、その後は汎近畿的な様相に変わっていきます。



弥生時代後期の受口状口縁甕の出土遺跡

伊勢遺跡の出現（弥生時代後期）

弥生時代後期の近畿地方では、下之郷遺跡の環濠集落のような大規模集落が衰退し、集落が散在化する傾向が見られます。そのような中、出現した伊勢遺跡では、現在までに大型建物12棟が見つっています。竪穴住居が一般的な住居であった時代に特異な景観を醸し出していたことでしょう。

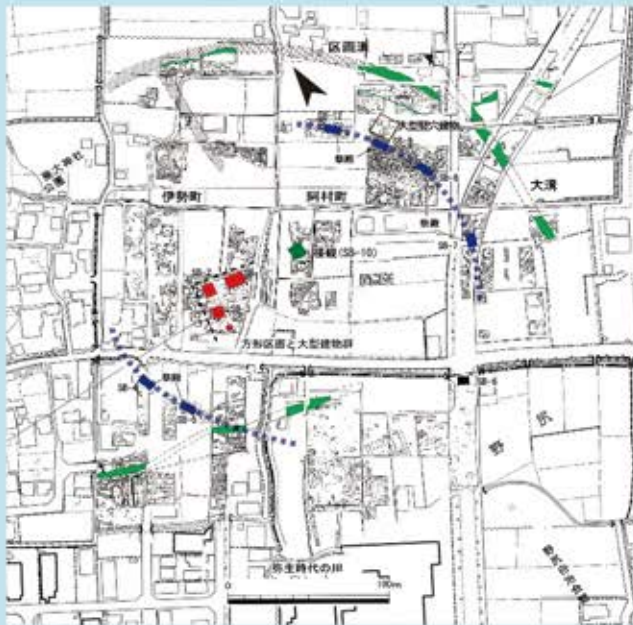
そのうちの3棟は、柵で画された方形区画に整然と配置されています。伊勢遺跡の大型建物では最大規模となる2間×4間の独立棟持ち柱建物SB-1と、その西隣にSB-2とSB-3が鍵状に位置しています。

そして、方形区画の東方約30mからはSB-10が見つっています。梁・桁行3間の縦柱式建物で、吉野ヶ里遺跡(佐賀県)で復元されているような、王が国見をする楼観に比定されています。

さらに、この方形区画を中心に直径約220mの軌跡上でも柱根が残存していたSB-4をはじめ、7棟の独立棟持ち柱建物が検出されています。このように、12棟の大型建物の規模や構造は多様で、それぞれの建物が機能を分担して、特別な空間を構成したと推察されます。



伊勢遺跡大型建物検出風景



伊勢遺跡大型建物位置図



伊勢遺跡大型建物想像図（小谷正澄氏作成）

伊勢遺跡に大型建物群が建ち並び威容を誇っていた2世紀半ばから後半にかけての日本について、倭国は大いに乱れていた「倭国大乱」、争乱の末1人の少女が王となった「卑弥呼共立」、3世紀の日本に30余りの「國」があったと、中国の史書である「魏志倭人伝」は伝えています。

ここで言う30余りの国とは、主に西日本各地で生まれた政治的に結びついた地域連合体が想定されています。全国的にも検出例のない大型建物群の発見を契機に、30余国のうちの一国が野洲川流域を中心とした滋賀県南部に形成され、方形区画された大型建物群と円周状に配置された大型建物群で構成される空間こそが政治や祭祀が執り行われた国の政治中枢部であって、「倭国」の形成に主導的な役割を担っていたのではないかと想像することもできます。

弥生時代後期後半の紀元1世紀末頃の野洲川流域では、もはやクニと呼ぶにふさわしいまでの地域的な統合が加速していったと考えられます。

伊勢遺跡も弥生時代後期末（2世紀末）には衰退し、受口状口縁に象徴される土器の地域色も消失していきます。独自の弥生文化を誇った野洲川流域も大和を中心とした新たな政治的枠組みに組み込まれていきます。